

借りている地球の使い方¹⁾

清水 國明²⁾

皆さんこんにちは。清水國明でございます。私は京都産業大学の卒業生が初めて出た年の入学生です。ソーシャル・マネジメントという素晴らしい学科もできまして、きょうは地球温暖化についての素晴らしいシンポジウムがこの後、行われるということです。私自身がそのことについて勉強しているわけでも何でもなくて、自然の中で単に過ごしているだけです。そういったライフスタイルが地球温暖化に直接どうなのかは分かりません。しかし、今の世の中に何らかの提案ができるのにかいな、ということで近頃結構取材とかもしていただいています。そういう今、自分がやっていることを中心にお話しさせてもらいたいと思います。

私の話は40分間で、40分もそんな難しい話できる自信がないので、途中でしゃべることがなくなったら『赤とんぼの唄』でも歌おうかなと。その方がいいという人のほうが多いというのは知っています。まじめな話や本当にお役に立つような話は、ぜひこの後のシンポジウムで勉強して帰っていただいて、私のは本当に時間つぶしてみたいなものですから、気楽に聞いていただきたいと思います。

ご紹介いただきましたように、ここ産業大学を卒業しましたが、在学中に原田伸郎と2人でバンドをやりまして、正確に言うと鶴瓶ともう一人、鶴瓶の嫁さんのレイコちゃんと4人で「あのねのね」というのをやっていました。何かのはずみで世の中に出させていただいて、東京に長いこと住んでいたのですが、今はそこを離れて富士山の麓の山梨県に移り住みまして、そこで暮らしています。

そこで、「自然楽校」という自然を楽しむ校として、自然体験施設や農業、環境などを、学ぶというよりも楽しみながら体で感じてもらうような体験施設を運営しています。子どもから大人、お年寄りまでを対象に、僕らは週末職人といっていますが、週末だけログハウスやカヌー、ナイフ、釣り竿などを造ったり、畑で野菜を作ったり、子ども作ったり、いろいろなもの作りをしながら過ごす人たちの、お手伝いをしています。そんなことができる場所を提供している自然楽校の校長先生をしています。そういった楽しい自然を皆さんに知ってもらうこと、そして自然の力を健康や癒しなどに活用してもらって、最終的には世の中みんなの心と体の丸ごと健康をサポートするという企業理念で立ち上げた会社です。

1) 京都産業大学経営学部ソーシャル・マネジメント学科主催シンポジウム「地球温暖化問題へのアプローチ—ソーシャル・アントレプレナーの役割と必要性—」(日時：2008年6月21日土曜日 場所：京都国際会館)の基調講演を清水國明氏の許可を得て収録したものです。なお、本章は、基調講演から活字化し大室悦賀がまとめ清水國明氏に確認をいただいたものです。この場をお借りして、清水國明氏に感謝申し上げます。

2) タレント、株式会社ワークショップリゾート代表取締役

その会社の前は NPO という特定非営利活動法人の形でやっていました。世の中と私に今一番そういうものが必要だという判断がありました。子どもたちや世の中の人に自然と親しんでもらおう、ということで始めました。先ほど先生とちょっとお話したときに、NPO はなかなかいいことですが、継続していくのが難しい、というのが分かりました。このソーシャル・マネジメントという学科があったら、もっと賢く立ちまわられたかもしれませんが、僕はそのとき全然そういう概念というか、そんなものを知りませんで、世の中にいいことだから一生懸命やろうということで NPO をやっていました。

まず続かないのは、文科省の子どもゆめ基金や子どもの居場所作りなどの助成金をもらいましたが、もらったお金と同じくらいの自己資金を用意しなければ運営できません。私は「自然暮らしの会」という 6500 人ほどの会の会長をやっています。その仲間に応援してもらって、NPO を山梨県の河口湖のふもとで運営していたのです。

ところが社会的にいいことで、社会のニーズに応じているというつもりでやっていたのですが、1 年やって「これはいいことだけけど続かん」と思いました。それは私も自己資金がなくなるし、良かれと思って手伝ってくれる人たちも東京や関東近辺からいっぱい来ますが、NPO だからその人たちの交通費とか全部自前でやってもらっていました。そうすると 4 回、5 回はいいけど、6 回、7 回はしんどいくなってだんだん来なくなる。NPO で自然体験を皆さんにしてもらうことによって、参加者はむちゃくちゃ幸せになっていきますが、ボランティアやっている本人がどんどん不幸になっていくわけです。誰かの幸せのためにわれわれが不幸になるというのは、おかしいですね。両方幸せになるような取り組みでないと、1 年、2 年はできても続かないということが分かりました。そして、早々に 1 年目で、株式会社を立ち上げました。

株式会社を立ち上げて、いろいろな企業の方を回りました。「今世の中にどんなものが必要だと思いますか」「地球環境というでっかいテーマですが、それに至るまでに子どもたちが自然や環境について、まず関心を持たなきゃいけないし、自然のことが好きにならなきゃいけないし、不自然なものを調整するような場所があると思いませんか」ということを、ずっといろいろな企業の方にお話をしました。そして、「株式会社を立ち上げるから」と言って出資をお願いしました。これがたくさん集まりまして、最終的に今 4 期目に入りまして、2 期の始まる前ぐらいまでに出資金でいうと 6 億 5000 円というお金が集まりました。NPO のときは全然そんなに集まらなかった。出資金で 6 億 5000 万円、芸能人でそんな大金を集められるのは清水國明か羽賀研二ぐらいです。最近は田中義剛が頑張っていますがね。

今、世の中には本当にいろいろ嫌な事件があります。子どもがおかしくなっている、若い人もおかしくなっている、この原因は何か。専門家の方がいろいろなことをおっしゃっていますが、私が思うのは子どもたちが自然の中で遊ばなくなった。それは自然から離れてしまったからではないでしょうか。自然から離れて、自然そのものをあっち行けと遠ざけてしまった。そして、心と体のバランスがとれなくなった。不自然な状況が起きて、ワットとムカつくからとたくさんの人を刺して

しまったり、親が子どもを殺したり、子どもが親を殺したり、おじいちゃんを殺したりというとてもない事件が起きている。こんな不自然な世の中はないと思います。

何とかそれを自然に戻さないといけない。この間外国の人と話したときに、「日本って怖いという評判が結構立っていますよ」と言われたので、「えー」と思いました。「親が子を殺したり、子どもが親を殺したりする国というのはテロ国家以上に危険だ。それは信頼関係がないわけですから、それは旅行をするときに注意しなきゃいけない国だ、という評判が立っています」と言われたのです。われわれは日常茶飯というか、ニュースを見てそんなニュースが流れない日がないぐらいですから麻痺していますけど、考えてみたらこれはちょっとおかしい。地球温暖化以前に子どもたちや若者たちのこの変なところを何とかしなければいけない、と思いました。

NPO のときもそうですが、会社というものはそういう世の中や社会に対してどれだけ役に立つか。世の中から「ありがとう」という感謝をどれだけ集められるか、という勝負です。ビジネスモデルというのがあって、チャリン、チャリンとお金もうかる仕組みを考える。それを考えた後は、毎日、いかに人に喜んでもらえるか、いかにたくさんの「ありがとう」を集めるかということだけ考えればいい、という話を聞きました。

そのように考えますと、「ありがとう」と言いながらそれをいくらしようかと考えているのではなくて、取りあえず毎日感謝してもらえることに取り組むことが企業活動だと私も今思っています。それがうまくいかないのは、最初のビジネスモデルが、感謝でお金が集まってこないような会社の仕組みがいけないわけで、それを考えなければいけない、ということです。そんなことで、世の中にどんなことをしたら喜ばれるのかということが、第一だと思います。

それと取り組むことに関して、自分はそれがむちゃくちゃ好きなことかということです。僕はオートバイだったり、キャンピングカーに乗ったり、いろいろなことをやっていますが、全部好きです。何回も結婚したり、そんなことをしていますが好きなことです。だから好きなことだったら我慢もできるし、チャレンジもできるし、持続力もあります。だから世の中の役に立ちたかったら、むちゃくちゃ自分が好きなことをやる、好きなことで成功しようという、このへんのきっかけが重要だと思います。

きょう先生に伺ったばかりですけど、ソーシャル・アントレプレナーでしたか、そういう社会企業家というのは、実はそういうことです。世の中に役立つことを事業として、それで自分が誇りも感じながらやるということですから、そんなことに組み込まないといけないと思っています。世の中で一番幸せな人は誰かという、好きなことで成功して豊かになっている人。2番目の人は、好きなことをやっているのですがでも貧乏な人。3番目は、自分の嫌いなことをやりながら成功してお金持ちの人。どうせだったら好きなことをやって成功するのを目指すべきだという話です。

そして4番目の最悪なのは、嫌いなことをしながら貧乏という人。これが結構多いという話です。私はそういうことをやっていたのですが、「これはいかんな」と思って、「取りあえず今は好きなことをやろう」それで好きなことが世の中に役に立つようになったら、それで成功してお金持ちに

もなれる。幸せなお金持ちになれるというランクがあります。

それで私が一番好きなのは、自然の中でああじゃ、こうじゃとやっていることです。もともとは福井県の山の中の生まれなので自然が大好きで、それしか取りえがないようなものです。そこにいるときは本当に自分らしく、オドオドせずに過ごせる。そして世の中に自然というものの必要性がある。そしてこの温暖化の問題にしても自然を理解して自然の摂理やバランスを考えないからそんなことが起こるわけです。だから、最初の一步として自然を体験して自然を好きになってもらおうじゃないか、ということで会社として「自然楽校」を立ち上げてやっています。

それで何とかやってきて、4期目に入りましたが、子どもたちが毎年7月、8月になったらてんこ盛りになってキャンプに来てくれます。ところで皆さんはお気づきでしょうか。子どもたちが集団で来るとすぐ分かるのですが、何かおかしいです。大昔からやっているわけじゃないですが、何かこのごろの子どもは生きていいのか、死んでいるのか分からないようなゾンビみたいな子がいます。むちゃくちゃきれいですけど、顔が白くてシャンプーのにおいがする。私の子どもときは鼻が出ていたと思いますが、そういうきれいな子が来ます。うちのところはむちゃくちゃ山の中ですから、セミとか鳥とかがとうるさいくらい鳴いてますが、「どや、セミがすごいやろ」と言うと、「どれ、何、どれが?」とか言ってセミの鳴き声が分からないのです。分からないというか、子どもたちの耳にはセミの鳴き声として聞こえていない。鼓膜にはジャージャー、ミーンミーンという音は聞こえるけれども、それは「セミが鳴いている」という風に心には届いていない。英語で言うと listen と hear という言葉があります。どっちがどっちか僕は知らないですけども、聞こえているだけで心に響かない。耳という機能のスイッチがまだ入っていないのです。

そして、私のところは標高が高いところにありますので夏でも寒いです。雨なんか降るとTシャツの子どもは鳥肌がブワッと出ます。「おまえ、それ、寒いやろう」と言っても「いや、別に」と言う。それはおかしいでしょう。鳥肌が立っているということは、体が「寒い」というメッセージを出している。でも、本人が寒いと気付いていないというのは、寒い、暑いとか、そういうことに対するスイッチも入っていないのです。「これはちょっとおかしいんちゃうか、この子ら」といつも思います。

うちの裏山はものすごく大きな山なんです。富士山といいますかね。そこの1合目に暮らしているので、みんなを富士山に連れて行きます。富士山が見えると、僕なんかむちゃくちゃ自慢なのです、それしかないから。「ほーら、富士山やぞ」と言うと、子どもらは富士山を見ても「ああ、あれは3,776メートル」とか。いやいや、数字はいいから、数字を言う前にまず感動してよ。大人だったら中央高速を走っているとき、観光バスの中から富士山が見えただけで「おー」と拍手が湧きますよね。そういう富士山を見たときの「おー」という感動がない。心が動いてないわけです。これは非常にフラットな、起伏がない状態。僕はスイッチが入っていないという言葉を使っているのですが、「フギャー」と生まれたら、たいがい人間や動物は自然の中にボテッと落ちて、そこで暑いとか、寒いとか、臭いとか、痛いとかいう刺激を受けて、それで全部スイッチが入るのに、今の子どもたちや若者は、

「フギャー」と生まれてから、安心・安全、楽で快適な空調が整っていて、虫もいない、へびもいない、フラットなところでつまずきもしない。そういうところでずっと育つ。つまり生まれてからバイパスを通して今の生活やってきたのです。本当だったら、暑い、寒い、臭い、痛いというところを通らないかん。そこさえ通れば勝手にスイッチがプチプチと入るように大昔からできています。これは神様か仏様かコックリさんか誰かがそういうふうに住掛けてくれているのに、そこを通らないでヒョイとやってくるものだから、スイッチが入らない。自然会の刺激に対しては反応できないのです。

これは逆にストレスがたまると思います。本来備わっている能力に出番が与えられず、皮をかぶったまま、ビニールの梱包がかかったままずっといる。便利だから五感ではなく二感ぐらいで生きていけるわけで、あとの三感みたいなものが、夜な夜な叫ぶのでしょうかね、「俺もちょっと背伸びしたいわー」と。それが現在のストレスであって、何かを使いすぎてストレスがたまるのではなくて、出番を与えてやらないからイライラしているのだと私は思います。だから、暑い、寒い、かゆい、「ヒャー」とか、五感を全部使う、第六感まで使わないと怪我してしまうみたいなの……。そういうところで「うわー」と叫んだり、「おうっ」とびっくりしたり、へびを見たり、赤とんぼをつかまえて羽を取ってアブラムシにしたりとか、そういうことをしながら遊ぶ。そこには残虐さもあります。そういうことをしながら人間としてどんどん成長していくようになっていくのに、その環境がないわけでしょう。「そんな、虫殺したらかわいそう」と言いながらやっていると、どんどんたまっていくものがあるのではないかと私は思います。

そういう子にスイッチを入れないといけなから、まず山の中へ連れて行って、山の途中の落ち葉のきれいなところで、「まず座って寝てください。そこで静かにして物音を聞きましょう」というプログラムを開発してやっています。ところがなかなか、「ぼっちい」「汚れる」と言って土の上に座ってくれないのです。「そんなところに座ったら、ママにしかられる」ということです。「どうか寝てくれ、次に進めないから」とお願いすると、「クリーニング代はどうなっているの?」とか、いろいろなことを言います。「やかましいわい、とりあえず静かにして」と言いますが、最後まで地面の上に背中を付けて寝転がれない子どももいます。「とりあえず黙れ、ジーッとして耳で聞いてみなさい、いろんな音があるはずや、聞いてみい、もう屁もこくな」と言って、シーンとさせます。

そうすると確かにセミや虫や遠くの飛行機や救急車とか、いろいろな音が聞こえるので、それでびっくりするわけです。普通聞こえているのにそれを聞こうとしないから、雑音として聞かなくてもいいようにフィルターを掛けているのです。まずそのフィルターを外すことが必要だと思います。それでフィルターを外すことによって、「うわ、こんな音があったのか」ということに気付くわけです。はじめてそこで聞くというスイッチが入るのかな、という気がします。

フィルターを外すといろいろなものが聞こえるらしくて、「森のささやきが聞こえる」という子も中にはいます。怖いでしょう？ 僕はそういうスピリチュアルなことは苦手です。うちの境目のすぐ隣が上九一色村ですからね。「そんな怖いこと言うな、うそつくな」とその子を叱りました。ただ、僕はツリーハウスという木の上に暮らしてもう5年目になりますが最近、森のささやきまでは分か

らないけれど、「森が何か言っているな」ということはジワーッと今は感じるようになりました。もしかしたらあのときの子どものほうが正解だったのかもしれない。

人間が大人になるにつれそういう感性を閉じ込めてしまっているのかなという気がします。それから高い山の斜面から「おりゃー」と駆け下りたりするような、そういうプログラムをさせると、ようやくゾンビみみたいな、きれいなお人形さんみみたいな子どもが、頬のへんがポッポ、ポッポ赤くなってきて、鼻が出てきて、子ども臭くなってくるのです。子どもの臭いってわかりますか。「うわー、こいつ子どもの臭いや」というような、シャンプー・リンスの臭いしかしないやつが、子どもの臭いがしてくる。それでようやくスイッチが入る。そのときに僕はうれしいんです。

そこでターザンごっこしたり、走ったり、転んだりしながら、「ぎゃー」とか言いながら、1日過ごします。そして帰るときに、付き添いで来ているお母さんたちが「うちの子のあんな笑顔、笑い声、あんな顔をする子だと思わなかった」と言い残して帰っていく。われわれの一番の喜びはそれです。「ああ、スイッチ入れられたなー」と思います。

きょうは地球環境とか、急いでそういう話もしないといけませんが、その前にわれわれがどんな肉体を持っていて、どんな感性で、どんなところに住んでいるのか、環境とか、それが分からないことには地球全体の病とか、そういうことも分からないと思います。自然に学ぶとか、自然というのはどういうメカニズムになっているかを学ぶ。学ぶ場合にはまず楽しむということですね。

私が楽しむことにこだわっているのは、勉強から入って、「自然は守りましょう」とか「環境は……」「生物多様性は……」ということからはじめると、面倒くさくて、子どもらは自然が嫌いになってしまいます。学校の先生がインストラクターで来て、ガーッと知識を詰め込もうとするからです。覚えることが勉強ではないです。それより体で味わう、感じるものが僕は好きです。自然が大好きになれば、その好きな自然だから守ろうと思うようになります。ところが「自然って厄介なものだ、ごみも捨てたらいかんし、枝も折ったらいかんというのだったら、めんどくさいから無くしてしまえ」と思ってしまうような気がします。私は自然の中で自由奔放に、本当にむちゃくちゃして遊んだから、こんな素晴らしい自然がなくなることには耐えられないという立場の人間です。その自然の中でむちゃくちゃ楽しんだ経験、感動した思い出のない人が、環境ということを語り始めると、ただヒステリックな、「とりあえず守れ、人間は入ったらいかん」という環境原理論者になってしまう気がします。そんな環境の守り方は好きではないです。特に頑なに自然を守ろうと言っているような人は、たぶん自然のことをあまり知らないと思います。

私は福井県の奥越地方という4メートルぐらい雪が降るところで育ちましたから、冬になって屋根の上に雪が2～3メートル積もると、家がミシミシといます。伊勢湾台風では隣の村が全滅しました。そういうところで生まれ育ちましたから、「うわー、自然って怖わー」と思っています。だから都会に出てから「自然を守ろう」という人が周りにいっぱい出てくると、「自然って俺らが守れるの？ 自然から見たら俺ら耳くそ、鼻くそやん」と思いました。そういう自然のすごさとか、パ

ワーみたいなものが分からない人が、箱庭みたいな自然を「そこに入ったら破壊されるだろう」みたいなことを言っているのだと思っています。本物の自然というのは人間がどれだけ悪さしようが屁でもないと思いますし、大きなことをいえば地球がどうなったって、地球は別に「大きなお世話や」というわけで、表面にいるカビみたいにこびりついている人間が勝手に何だかんだ自分の都合で言っているだけの話ですから、地球は病んでいるというもおこがましい話だという気は一方でしています。

自分が今自然というものとどういう関係性を持って生きているのかということ、体をもって体感してもらいたいというのが自然楽校の願いです。私は校長先生で、子どもたちを森へ連れてゆくと、「この葉っぱは何ていうんですか」とこまっしゃくれたやつがノートとか出して、そこで学習姿勢を見せようとしてくるのです。「先生、これは何ていう花ですか。あの鳥は何ていう鳥ですか」と聞かれますが、自慢じゃないですけど、私は自然楽校をやっていながら、花の名前、草の名前を知らないです。「これはな、おっぼこべ」「あの鳥は、ぺっぺけべ」とか、いろいろなことを言いながら、「えー、そんな名前ない」「いや、俺はそう付けたんじゃ」と開き直っています。そんな名前なんか覚えなくてもいいですよ。そんなものは本当に知りたければ、帰ってから図鑑でも、ネットでも何でも調べたらいい。名前を覚えることよりも、「そのへんつまんで食べてみい」と言います。私は鳥の名前はほとんど知りませんけれども、うちの森に住んでいる、飛んでいる鳥の味は全部知っています。たいがい食べました、以前にはカラスまで食べました。体で味わうということが体感だと思っているのです。

そういう体感を通して自然を知るということで、自然の中からのいろいろなメッセージを受け止めることができるのではないかという気がします。自然の中で思うのは、自然の中でブクブク蓄えているやつはそんなにいないということ。必要以上に備蓄していませんね。リスとかは結構隠していますが。今メタボと言われていますけど、思い切り肥満するほど食べ過ぎるのは人間だけです。ライオンにしても腹一杯のときは狩りをしません。そういう意味では自然から教わることとすれば、足るを知るということですか。「これでいいや」。ところが人間は「もっともっと」という病気にかかっている、100万円もうけたらもう200万円ほしくなるし、1,000万円あったら絶対1億円欲しくなるという、「これでもか、これでもか」という「もっともっと病」にかかっている人がいっぱいです。それはお金だけではなく、快適さとか、便利さとか、楽さ、そういったものにも「もっともっと便利に、もっと快適に」というふうに生きることが、アクティブに積極的に生きることだと教育を受けていますので、まず自己満足したらいかんと言われています。けれど、「自己満足せんかったら誰の満足のために生きるんや」と思います。自分が満足して、「よし、これでよっしゃー」と線を引いた人は、そこから安らかに生きていけますが、1億円持とうが2億円持とうが、隣に10億円持っていたら、イライラするわけです。だから安らかに生きていくためには足るを知るという、「自分はこれで満足です、これでOK」という線を引くのが大事です。

地球の環境とか、温暖化の原因はいろいろ言われていますが、僕はこの「もっともっと病」とい

うのが原因ではないかと思います。「もっと快適に、もっとでかく、もっと楽に」ということで、楽とか、快適をずっとこのまま追求していったとするとどうなるかということです。楽と楽しいは字は同じですけど意味はまったく違います。楽をずっと追求していくと、立っているよりも座ったほうが楽です。バスの座席に座れてよかったというでしょう？ 皆さんにしても、きょう座って僕は立っています。どちらが楽かという皆さんのほうが楽です。皆さんにしても、無理やり呼ばれた学生さんもいるかもしれませんが、本当だったら下宿で寝ていたほうが楽です。家に帰って風呂を沸かしたり、飯を作るのは面倒くさいなと思ったら、そのまま寝た状態で栄養を入れてもらって、風呂も入らないで体を拭いてもらえるような状態が一番楽です。楽というものの究極を極めていったところにあるものは寝たきり状態です。

だからそういう寝たきを求めて、今1億何千万が寝たきり街道をドーッと進んでいるわけです。だからそういう寝たきり街道は嫌だと思って、自分で生きようと自然の中で何かするというと、「何でわざわざそんなことするの？ 何で楽で快適な家があるのにわざわざ山でキャンプなんかするの？ 何で寒いときにわざわざアラスカまで行ってキャンプなんかするの。冬はこたつでミカンやないの」と友人の鶴瓶にも言われました。それは寝たきり街道を歩いて行って、寝たきり状態になるのが嫌だから、自分の足で「おりゃー」と立ち上がって生きている実感が欲しいからです。「もっともっと快適に」というところから、何とか自分だけでも自分で食べる分だけは作りたい。僕は今自宅の庭で炭を焼いています。エネルギーに関しても全部は全部できないですけど、何か自分なりの取り組みをすることでちょっとスツとします。そういう生活をしたいと思います。楽を追求していく寝たきりよりも、苦しいけれども楽しいという生活を選ぶことが、これは僕なりの地球温暖化に対する取り組みになるのかなという気がします。

エコハウスというテーマで先日取材を受けたのですが、「どんなエコなことをやっていますか」と言われたときに、実はその取材を受ける瞬間まで何も考えていなくて、「いや、弱ったなー」と思いましたが、「家が小さいんですわ」と言いました。今ごつつう小さいところに住んでいるので、「これ、エネルギー使わへんでしょ」と。トイレと風呂があって、小さい家を自分で建てて、そこをベッドルームにして、リビングはログハウス建てて、一個一個小分けしているものだから、暖房費がちょっとしかかからない。こんなでかい会場は暖房も冷房効率も悪いです。こういう大きいところに住むことが自慢になってしまうと、これはエネルギーがいくらあっても足りない。「これでよし」という線を引くことですね。自分のスケールを知ること。それから溜めこみ過ぎないということ。「もっともっと」ということをしない。根本の「もっともっと」が治らない以上、いくら電気を消したり、お風呂の水をリサイクルしたり、そういう取り組みをしても、どこかでまた大きな無駄が出てしまうのではないかという気がします。

今の現代人は大名行列をやっているのと同じらしいです。一人ひとりが大名行列をするのと同じぐらいのエネルギーをいっぱい使っているのです。「下にい、下にい」といって移動するのと、車でビーッと行くのと同じエネルギーを消費しています。ところが車で行くところを自転車でピッと行

けばどれだけの節約になるか。われわれが一個一個の快適さ、楽というものに見切りを付けて、線を引きここまで楽でやめておこう、と取り組んでいかない限りは難しいですね。温暖化で氷が溶けて海面の高さが上がるなど環境の問題はいっぱいありますが、みんなが足を知らなければ、そういう現象が止まらないのではないかという気がします。

私の母校もエスカレーターが出来てましたね。あれはびっくりしました。エスカレーターが出来てよかったな。僕らも夢で思いましたよ、ここにエスカレーターがあったらいいな。後輩の諸君がいると思いますが、あそこは階段だったのです。雨が降ると滝のようにガーツと雨水が流れて、鯉の滝のぼりみたいにして昇って行ってました。それが時代の流れでしょうね。「鯉の滝のぼりできますよ」といって学生を集めても来ませんからね。今は京都ゴルフ場の芝生をまるで自分の学校の庭のように写すパンフレットというのは、もうやめましたか。あれを見たばかりに入ったんですけど、田舎で「あんなキャンパス生活が夢やな」と思って入学してみたら京都ゴルフ場でした。

話戻しますが、つまり楽よりも楽しいがいいと選んで、自然を遠ざけるのではなくこちらから近づいていかないといけないということです。子どもたちが自然から遠ざかってしまったのは、世の中が「自然は訳け分からないから、あっちゃやとけ」と遠ざけたから、自然の中で親しむような場所がなくなってしまった、ということが原因なんです。

私は福井県の河原でずっと泳いでいたので、その河原へテレビ番組の取材で行きました。「ここで私は育ったんですよ」といって見せようと思ったら、河原へ続く道に看板があって、「良い子は川で遊ばない」と書いてありました。「清水さんは悪い子だったんですね」と面目丸つぶれ。そして村にはプールができていました。昔の建設省のデータらしいですけど、プールで遊んでいた子と、海や川で、1年のうちに2～3人流されて死ぬようなところで遊んでいた子を追跡調査してみたら、プールで遊んでいた子よりも自然の中で遊んでいた子のほうが、公德心や正義感、協調性などが全然違っていったデータがあるそうです。やはり人間が人間らしく生きていくためには、もっともっと自然の中で、自分と他人との距離感にまみれながら育つ環境が必要ではないかという気がします。そういったものを構築する、作り出す、見いだす。それからそこをつなぐというようなアントレプレナーがもっと出てこなければいけないと思います。

うちは今、畑で無農薬・有機の野菜を作っています。子どもたちに植えるところからやってもらって、収穫時にはワーツと取らせて、それを持って帰ってきてうちの体験施設でピザにして、石窯で焼いてもらう。ひたすら森の中を走り回るとか、最高の調味料は空腹だといいながら一食抜いて経費を節約するとか、いろいろな取り組みがあります。そういうところでスイッチを入れていろいろ体験してもらうということが、本当に世の中で広まっていくといい気がします。

環境というのは、環状線の「環」です。それは輪という意味ですね。輪っかの境目が大切です。自分を取り巻く環境の輪っかの境目はどのへんかということを考えることが、環境を考えるということです。地球というでっかい輪っかに、最終的にはそこまで広がればいいですけど、とりあえず自分が今持っている輪っかはどれぐらいの大きさかということを考えてみるのが、環境を考えるっ

てことです。

山梨から東京へしょっちゅう通っていますので、途中のパーキングで止まってオシッコしたり、ウンチしたりしています。そのときに僕が停めた横にシャコタンの暴走族か何かの黒い車が止まりました。そのお兄ちゃんがバツと外へ下りてきて、サンダルにはき替えて、バタバタとトイレに行つてパーッと戻つてきて、動き出す前に窓を開けて、灰皿の吸い殻を、カンカン、カンカーンと外に落として、それからブワッと行ってしまった。「何をするんや、こいつは」と思いましたね。そいつの環境の輪っかの境目というのは、その車のドアまでです。中はめっちゃめっちゃきれいです。土足禁止にするぐらいきれいだけど、そいつの環境の境目はそこだから外はどうでもいい。その境目がもうちょっとパーキングの端っこだとか、もうちょっと広がっていたりするとそんなことはしません。この会場で皆さんはつばを吐きませんね。そのように、みんなが心地いい環境の輪っかが重なり合うことによってどんどん良くなります。家前のごみをはいているときも、たまったごみを隣にパッパッと引き出してしまおうか、隣の方まで掃除するかという違いです。

私はそのスケールでしか環境の話はできないのですが、たぶんそういう自分の「もっともっと」がどこまでなのかということと、自分が考えている心地いい空間というものをどのスケールで考え、その輪っかを広げようとしているのか。自分だけよければいいという利己になっていくのかという、そういうことが環境を考えるとということなのかと思います。

それで社会企業家ということでは、皆さんにも僕は目指してもらいたい部分があります。今、都会暮らしから自然暮らしにシフトする動きはあります。人生のエピローグをどうせだったら自然に囲まれて暮らしたい。しかし、シャケでもバーツと太平洋を泳いできて、いきなり川へ上ると死んでしまいます。上る前に河口の汽水域で真水に体を慣らしながら回遊して、「よっしゃー」というときにバタバタと上がるわけです。そういう汽水域の真水と海水が混じり合うような、体を慣らすようなところがいま世の中に必要だと私は思っています。

私の自然楽校というのは、都会で自然と無縁で育つて暮らしていた人たちが、人生の後半を「よっしゃー、今度は自然や」と思ったときに、そこで体を慣らすような場所を提供するというビジネスなのだと考えています。それを皆さんにもやってもらいたい。やりたいなという人は是非考えていただきたいと思います。地球環境、温暖化を考えるとときには、自分のできる範囲で、しかも冒頭申し上げた自分の好きなことで取り組めるということに邁進していただくのがいいと思っています。

支離滅裂というのはこういう講演のことだと思います。何ら基調講演でなかったと思いますが、一応私は時間給なのでピッタリと終えたいと思います。2分オーバーしましたので追加料金ということで……。分かりました、負けておきます。何か質問はないようなのでこれで終わりたいと思います。この後のシンポジウムでちゃんと勉強してください。どうもありがとうございました。